B 138　昭和前半期の女子服装に関する一考察

奈良女大家政　相川佳子

目的　第二次世界大戦終結後，日本の女子服装の主流は和服から洋服へ一気に転換した。この大きな転換の背後には，明治以降の，和服が女子服装の主流であった時期に，和服の欠点を指摘し，女子服装を改良しようとする試みが幾度かくり返されていたことを看過してはならない。本研究は明治大正期の和服改良運動をふまえて，昭和前半期の和服改良と戦時服に着目し，戦後の洋服普及の要因をあきらかにすることを目的とする。

方法　明治以降の女子服装の改良に関する各種の文献，裁縫書，婦人雑誌などにより資料を収集し，考察を行った。

結果　明治期の衣服改良運動は，大正期には生活改善運動の一環として，服装改善運動へとつながった。しかし明治大正期の試みは，女学生などのごく一部の服装に変革をもたらしたにすぎなかった。このことは女子の日常生活において，服装の変化を必要とするという意識が未だ高まっていなかったことを示している。昭和10年以降，機能性と経済性の両面から和服の改良がすすめられ，婦人標準服の決定をみた。この時期の改良運動は，戦時体制のもとでの日常生活の急激な変化に伴う服装改良の必要性を人々に認識させた点で評価できるが，でき上ったものは和服でもなく洋服を超えるものでもなかった。ただ，下半身着として奨励されたモンペは，女子の戦時服として和洋両様の上半身着に対応するものとされて広く普及し，社会状態の変化に和服がもはや適応しがたいことを教えた。ここにおいて意識の上でも和服から洋服への転換がはかられ，戦後の洋服時代を迎えるための素地が作られた。